



**岩滝村の土地絵図**  
**明** 治21年(1888)7月 作成の岩滝村の土地絵図「京都府與謝郡岩滝村字大風呂日ノ内野田全圖」を観察すると、今の岩滝橋から橋立中学校前を通る直線道路が描かれていないことがわかります。岩滝橋は描かれているので、岩滝橋から先の道が未完成だったこと

とになります。また、この道は明治26年(1893)の大日本帝国陸地測量部作成の地形図には描かれているので、明治21年〜26年の間に完成したことになります。  
 この道路は、石川村や明石村で見られたようにもともと道ではなく、田んぼの区画を無視して貫通する「直線道路」として作られたことがわかります。

直線道路の目的は荷車の安定通行を確保して、人の移動や物流の大量化、スピーディー化を促して経済効率を上げことにありました。現在の自動車の道路敷設と同じ道路計画概念です。  
 明治時代には近代化の一環として陸路の整備事業が実施されたことがわかります。

(与謝野町教育委員会)



景色の良い田舎道のコーナー

**皆** さん、こんにちは。加悦中学校ALTのダークです。

**高速道路料金に驚いた日本での第一印象**

私が日本に初めて来たとき、正直いけば驚いたのは高速道路の料金でした。与謝野町から

京都市まで往復すると4000円を超えます。ガソリンを1回満タンにできるほどの金額です。

一方、私の住んでいた州には有料道路が一つしかありません。「ユグノートンネル」というトンネルだけです。しかも、南アフリカでも特に危険だと言われる峠を通るトンネルで、料

金は500円ほどです。だから僕の家は、「高速道路はなるべく使わないようにしよう」とすぐに決めました。  
 そしてそのとき、日本は本当に「ドライバーの国」なのだと感じたのです。確かに高速道路を使えば移動時間は半分、場合によってはそれ以上に短縮できます。でも、日本の田舎道は本当にすばらしい。小さな道が無数にあり、その先にはきっと何かおもしろい発見があります。美しい滝、息をのむような景色、まるで過去の記憶が漂っているかのような廃神社や空き家――。

**曲がりくねる道に感じた日本の魅力**

日本の田舎道や山道が楽園のように感じられる理由は、景色だけではありません。南アフリカでは、まちを出ると制限速度は100キロや120キロが普通です。景色が美しいこともありますが、リーステート州の平坦な農地は、正直なところ単

調です。さらに、西ケープ州を除けば道路の状態もあまり良いとは言えません。大きな穴ぼこが至る所にあり、「自分の国の道路をまっすぐ走るのには酔っ払いだだけだ」という冗談があるほどです。

しかし、最大の違いは道路の状態だけではありません。私たちの国の道路の多くは一直線です。運転は単にA地点からB地点へ移動する行為になりがちで、そこに冒険心はあまり生まれません。それに比べて、日本の小さな道は曲がりくねり、アップダウンも激しく、まるでサーキットのようなコーナーが続きます。制限速度は遅くても、軽自動車でも十分に楽しめます。そして何より、忙しい世の中だからこそ、こうした景色の良い道は混雑が少ないのもうれいところですね。  
 いつか日本で過ごした日々を振り返るとき、私はこのすばらしい国の田舎道を走った時間を、最も懐かしい思い出の一つとして思い出すでしょう。

**与謝野町 新規指定文化財の紹介**

～ 近代の絹織物業の姿を伝える貴重な資料～

● 織物見本帖「橋立」(西山機業場) … 1冊

附 織物見本帖「標本」(西山機業場) … 1冊  
 (令和8年2月27日付け)

本物件は、丹後・加悦谷にちりめん織り技術を伝えた人物の一人である手米屋小右衛門の直系の杉本治助家に伝わる丹後で最古の織物見本帖で、治助の後継者の米治の代の明治41(1908)年ごろのもので

明治政府の殖産興業において、絹織物の発展のために、製品の意匠・デザインの洗練や多品種化が求められており、これに関連して織り技の実用新案などの登録が推進されていました。本物件は、当地域においてこれらの取り組みを明確に示す誠に希少な資料であり、明治時代の丹後・加悦谷地域の絹織物業の姿を伝える歴史資料として高い価値を有しています。

【寄贈者】この貴重な資料は、西山機業場御当主の杉本成史様からご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。

